



写真7 拝殿側背面



写真8 拝殿内部



写真9 拝殿背面虹梁



写真10 拝殿正面石階左側面銘文

## 法性寺毘沙門堂の戸板裏書と津山愛染寺

東昇

法性寺境内の毘沙門堂にある戸板の裏書は次のように記されている。

此造作、文政五壬午年閏正月朔日より同四日迄二成就ス

大工三木郡藤原忠治郎、願主作州津山西寺町高室山愛染寺快教法印、浄本房敬白

此僧従明石来当時世話人也

この裏書は、文政5年（1822）閏正月の造作に関する記録である。後半の願主美作津山愛染寺に関して、津山郷土資料館・津山市史編さん室小島徹氏よりご教示いただいた。この愛染寺は、現在もこの記述と同じ津山市西寺町に現存する寺院で、慶長10年（1605）快雲によって創立された、法性寺と同じ古義真言宗である。もとは高室山愛王院金剛寺として、藩主森家の庇護を受け、延宝年間（1673～1681）に愛染寺と改称した。明治9年（1876）に正保元年（1644）建立の仁王門兼鐘楼門（市指定重要文化財）を残して、本堂などが焼失したため記録が残っていない。

裏書の快教は、愛染寺住職第6世、美作出身、上森原極楽寺（岡山県鏡野町）住持の後、愛染寺に移り中興の祖とされ、延享2年（1745）3月12日に示寂している（津山郷土史料館所蔵矢吹家弓齊叢書154-4）。裏書の文政5年と快教の活動時期は約1世紀程離れるため、明石から来た世話人の浄本房は、快教の弟子などの系列に関係する人物と考えられる。

### 参考文献

文化財保存計画協会編『津山市指定重要文化財愛染寺仁王門兼鐘楼保存修理報告書』愛染寺、2004年

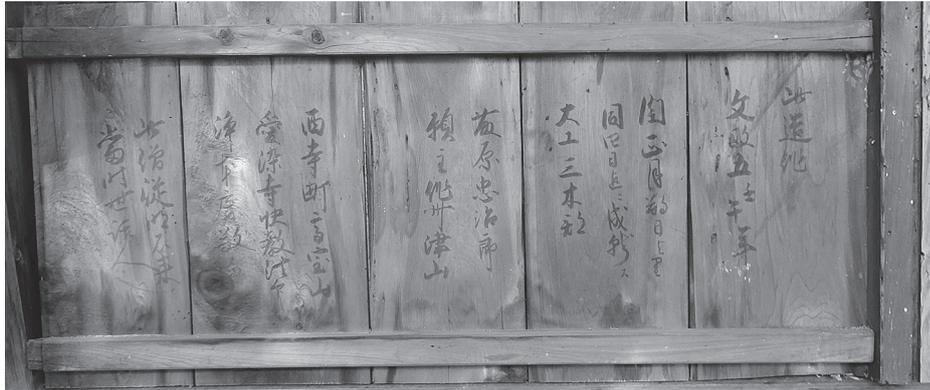


写真1 戸板裏書

## 大歳神社の絵馬にみる中国故事

向井 佑介

柏尾の大歳神社にある絵馬4枚のうち2枚には、中国風の装束を身につけた人物が描かれている。本書の報告番号にしたがうと、絵馬1の「吉備大臣・呉大尉玄東対局図」と絵馬2の「檀溪渡水図」がそれである。

絵馬1は「吉備大臣・呉大尉玄東対局図」と称され、養老元年（717）に遣唐使として入唐した吉備真備と碁の名手であった呉大尉玄東の対局の場面が描かれている。吉備真備の背後からのぞく幽霊は阿倍仲麻呂であり、椅子に坐して対局を観戦する人物が玄宗皇帝で、皇帝の椅子のうしろから顔をのぞかせている小型犬は、楊貴妃の愛犬と推定される。手前でお茶を出している女性は玄東の妻隆昌女で、対局のなかで玄東が負けまいと妻が碁石を隠したというストーリーが、近世後期の好華堂野亭『扶桑皇統記図会』にみえ、歌川国貞の浮世絵「金烏玉兎倭入船」にも「吉備大臣」「呉大尉玄東」「安部乃仲麿霊」「玄東妻隆昌女」が登場する。これらのもとになった説話は、平安後期から鎌倉期に成立した『江談抄』や『吉備大臣入唐絵巻』にみえるものの、ストーリーや登場人物は近世後期のそれと異なっている。

絵馬2は「檀溪渡水図」あるいは「玄德躍馬跳檀溪図」などと呼ばれ、三国志の英雄として著名な劉備玄德を描いたものである。後漢末、劉表のもとに身をよせていた劉備が襄陽で蔡瑁らに暗殺されかけた際に、「的盧」という馬に乗って檀溪を渡り、追っ手から逃れたという故事にもとづく。近世には、『三国志演義』をもとにした湖南文山による翻訳本の『通俗三国志』が元禄年間に刊行されてひろく読まれており、これに挿絵を加えた『絵本通俗三国志』も天保年間には出版されていたため、日本でもよく知られた題材であったことは間違いない。ただ、『絵本通俗三国志』に用いられた挿絵や、歌川国芳の浮世絵「通俗三国志之内 玄德馬躍壇溪跳図」、巖島神社の絵馬など、当時よく知られていた絵はいずれも大歳神社の絵馬と構図が異なっており、大歳神社例の系譜は明らかでない。

興味深いのは、「吉備大臣・呉大尉玄東対局図」と「檀溪渡水図」は、いずれも播州をはじめとする地域で祭礼に用いられる屋台彫刻の主題となっている例があり、それらを含めて系譜をさぐっていくことが今後の課題となるであろう。